

おおくらきたいせき
大蔵北遺跡

所在地：敦賀市大蔵地係

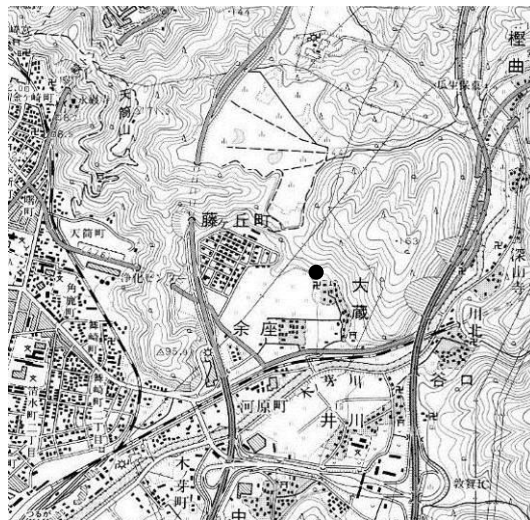
調査原因：北陸新幹線建設事業

調査期間：平成29年8月1日～11月30日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：556 m²

時代：室町時代中期～江戸時代後期



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 大蔵北遺跡は深山の南西側、南に伸びる標高約39mの尾根頂部から斜面及び谷部に広がる中近世墓群を主体とする遺跡です。今回の調査区（写真1・2）は大蔵寺の庫裏・本堂の北側に位置します。遺跡範囲の南西部にあたり、北陸新幹線事業による橋脚建設のため、発掘調査を実施しました。調査の結果、中近世墓群と墓壙などを検出しました。

遺構 尾根平坦地では主に区画を伴った近世墓群が残されており（写真3）、甕棺が2個体見つかりました。甕棺1では中から六道銭が、甕棺2には笏谷石製の蓋石が被せられており、中から人骨一分と六道銭が出土しました（写真4～6）。それ以外に一分の人骨のみが出土した墓壙も確認しました。いずれも墓石を伴っていないため被葬者名は不明です。

尾根の南側・東側斜面では区画を伴った中近世の墓石群（写真8～10）の下から、浅い土坑（写真11）や遺体・火葬骨・蔵骨器等を収めた墓壙を検出しました。墓石群以外では墓参に利用したと思われる石段や土留を目的とした石列も見つかりました（写真7）。

遺物 五輪塔、宝篋印塔、五輪塔板碑、楡型墓標、石廟の台座など中近世に使用された墓石類約300点を検出しました。最も古い墓石は文明4（1472）年の年号が刻まれた五輪塔の地輪です。過半数は調査前から地表面に露出した状態でしたが、墓参が途絶えたため土中に埋没したものや区画石として再利用されていたものもあります。

墓石以外では、近世の土師質皿や甕棺、蔵骨器に使用された越前焼、六道銭として使用された寛永通宝などを検出しました。

まとめ 墓石に15世紀後期～19世紀後期の年号が刻まれ、土坑や墓壙から17～19世紀の土器を検出していることから、造営時期は室町時代中期から江戸時代後期と考えられます。

今回の調査で注目すべき点として、中世の神職関係者の墓石を確認したこと、尾根平坦地に気比神宮の宮司や大祝を代々務めた社家である嶋（島）家、河端家の近世墓が残されていることが挙げられます。大蔵寺の南東には敦賀郡の東方鎮守社である大椋神社が鎮座していますが、古来よりその背後の山は神域とされ、周囲では経塚が造営されていました。そして、その神域に所在している大蔵寺は中世以降、気比神宮の祈祷所として機能していたと考えられています。このような歴史的背景から、今回調査した墓域は気比神宮の神職関係者の埋葬・墓参の地として使用されていたと推測されます。（鈴間智子）



写真 1 大蔵北遺跡 調査区全景（墓石撤去後）



写真 2 大蔵北遺跡 現況写真



写真 3 尾根平坦地・東側斜面（北東より）



写真4 甕棺2 掘削前（東より）



写真5 甕棺2 笏谷石製蓋石（東より）



写真6 甕棺2・六道銭



写真7 東側斜面 石段・石列（北より）



写真8 南側斜面 墓石出土状況（北より）



写真9 東側斜面 墓石出土状況（北より）



写真10 東側斜面 墓石出土状況（東より）



写真11 東側斜面 墓石撤去後（東より）